



むらぐち・かずたか 1958年
徳島県生まれ。慶応義塾大学
卒業。84年に野村証券系ベン
チャーキャピタルに入社。98
年に独立し、日本初の投資事
業有限責任組合を設立。投資
から公開まで幅広い支援を行
う。現在、ハイテク関連、大
企業スピンアウト型投資の組
み立てに注力中。

起業家体験教育の試み

日本テクノロジーベンチャーパートナーズ
投資事業組合代表

村口 和孝

現在、巷では日本人の起業家精神の衰えが問題となっており、中には「本来、日本人に起業家精神が乏しいのではないか」という暴論すら出ているが、子供たちを見る限り、私はむしろ日本の未来に明るい可能性を感じている。私の事務所の本業である創業ベンチャー立ち上げ支援のノウハウを投入し、毎年、ボランティアで行っているのが「少年少女起業家体験プログラム」である。一九九九年、東京都大田区池上本門寺での開催から、今年で数えて五年目となる。

まず、小学校高学年、中・高校生が約五人のチームに分かれ、独自の事業計画を作成し、大学生扮する一日ベンチャーキャピタリスト（投資家）を説得する。子供起業家たちは自分で出資し（千円程度）、社長を決めて会社を設立登記、その上で学生投資家に数万円の株券を発行し、必要準備資本を獲得する。次に街に出て資本を使い仕入活動（領収書に化ける）を実践。さらに街の祭り会場等で店開きをして販売を実行（もちろん、売値変更は自由）し、終了後、現金を数えて決算書を作成する。その後、本物の会計士に監査証明書を発行してもらい、株主総会で営業報告、納税（義援金等に寄付）後、利益配当を行った上で会社を解散する。

優秀な会社は元の出資金が五倍以上となる高配当だ。一方、駄目な会社は赤字になり、元本割れ。現金を使う現実の経済活動なので、子供たちは一生懸命だ。利益は持株に応じて公平に分配、最初から競争原理が働いている。ここでは必ずしもガリ勉が優秀とは限らない。

実施して毎回驚かされるのは、子供たちの資本主義経済、会社設立運営に対する理解の早さ、自然さ、健全さと、状況変化への適応能力の高さである。会社の仕組み学習は、部分部分を切り離さず一連の作業として体験させると、子供たちは「あっ」という間に本質を理解する。

最初は現金の分配を伴うことや利益を追求することなどから教育委員会などで問題になるのでは、という懐疑的な意見が多かったが、開催とともに参加した子供たちが「現実の会社運営がこんなに大変とは知らなかった」と驚くなど教育効果が上がり、今では学校の先生も積極的に参加するまでになっている。会社は子供にとって親が関係する身近な存在なのに、学校で時間をかけて学ぶことが少なく、受験問題にもあまり出ない。進学だけが未来でない子供たちの教育に、会社の仕組み体験学習はますます必要になってくるだろう。